

ワタン / Homeland スタディーズ①

現代イラン文学における Home/Homeland  
Home/Homeland in the Contemporary Iranian Literature

ワタン研究プロジェクト[編] / 岡 真理 [責任編集]

## 「ワタン/ Homeland スタディーズ」シリーズ 刊行にあたって

### 《ワタン》を通して人間と現代世界を考える

「ワタン」とはアラビア語で“Homeland”を意味することばです。そこで生まれたか否かを問わず、人がそこで生活を織りなし、自らの「ホーム」とする場のことです。近代以前、先祖や自分が根を下ろし、生を紡いできた土地——ふるさと、故郷、郷里、くに、アラビア語では「バラド」——と重なっていたそれは、やがて近代国民国家の成立とともに、「祖国」をも意味するようになります。ペルシア語をはじめとする中東の諸言語では現在、このアラビア語起源の「ワタン」が「祖国」を意味する語彙として広く用いられています。

アラビア語の「ワタン」は、日本語であれば「故郷」と「祖国」という二つの異なるシニフィアンによって表現される二つの概念が含意されています。生まれ育った郷里としてのワタンと、その外延がナショナルな境界（国境）にまで拡大した想像の共同体としてのワタン／祖国。そのふたつのワタンのあいだに何らの齟齬や乖離、痛みを覚えることなく、それらを同心円的な拡大として経験できる者たちは、ある意味、恵まれた「幸福」な存在です。そこが自分の祖国であること、自分がその国民であること、それを自明のものとして、その共同性のなかに安住することができる者たちだからです。しかし、近現代の、中東に限らず、世界の人間の歴史は、それがむしろ例外的で、特権的な経験であることを物語っています。

近代の植民地主義によって、植民地支配下に置かれた人々は、自らのワタン（郷里／故国）にいながらにしてワタン（祖国）を奪われま

した。物理的にワタンを追われ、エグザイルとなった者たちもいます。あるいは独裁体制のもとで、人間のホームであるべき祖国それ自体が、巨大な監獄と化している場合もあります。さらに、難民や移民など人間の生の経験が地球規模で国境横断的に生起する現代世界においては、人間はワタンとますます多様に、痛みに満ちた関係を切り結んでいます。人間とワタン／ホームランドの関係性がどのような形で現象しているか、その表象を通して、それぞれの社会のありようと、現代に生きる人間の生の実存と現代世界そのものの姿が見えてきます。

そのような問題意識から、中東現代文学研究者が中心となり、2012年度より、中東現代文学や現代中東文化における「ワタン」表象をテーマとする研究プロジェクトを継続してきました。プロジェクト3期目の現在は、「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」と題し、対象地域を地球規模に拡大、中東を中心に世界の諸地域を専門とする人文学研究者が協働し、文学や映画、音楽など多様な「ワタン」表象の分析に取り組んでいます。

ネーションを所与と見なし、その同一性に収まらぬ者たちを排除するレイシズムや排外主義が世界を席卷するなか、本研究プロジェクトは、現代世界において人間がワタン（祖国／故郷）をいかなるものとして生きているか、その考究を通して、ネーションや地域を超えて人間の経験をグローバルに貫く普遍的な課題とは何かを明らかにし、新たな人間解放の思想を創出するための基盤づくりに貢献したいと考えています。

プロジェクト代表  
岡 真理

ワタン研究プロジェクトでは、研究成果の一部を、「ワタン/Homeland スタディーズ」シリーズとして随時、刊行します。

本書所収の二つの論考は、2021年1月、「ワタン (Homeland) を考える」をテーマに京都大学にて開催された中東現代文学研究会における鈴木珠里さんと中村菜穂さんの発表がもとになっています。さらに研究資料として、フォローク・ファッロフザードとスィーミン・ベフバハーニーのペルシア語詩を鈴木さんによる日本語の対訳つきで収録しました。また、大阪大学名誉教授の藤元優子先生から、これら論考の学術的意義を日本のイラン文学研究史のなかに位置付ける貴重な序文をお寄せいただきました。

岡 真理